戦国時代の口語と現代語の共通性

堀田宗一郎　23B12904
東京工業大学工学院

1. はじめに

ドラマやアニメなどで現代にいる一般人が戦国時代にタイムスリップするという場面をよく目にする。それらの作品では現代人と当時の人々が難なくコミュニケーションが取れている。果たして本当に円滑な意思疎通が図れるのだろうか。そこで、Research Question を「現代人が戦国時代にタイムスリップして話は通じるか」と設定する。戦国時代の話し言葉が記載されているような当時の文献と、現代語を見比べ、理解できるか調べる。

2. 方法

そもそも戦国時代とは応仁の乱（1467 年）から江戸時代が開かれる（1615 年）までの約 140 年のことを指す。ここでは当時の文献として『天草版平家物語』を取り上げる。『日本語の歴史』（今野真二,2015 年,p94）によれば、『天草版平家物語』は「『世話＝世間で普通に使われる言葉（口語)』にわかりやすくした平家物語」で、「かなりの部分を『話し言葉』に換えた」とあるので、戦国時代の話し言葉が記載されている文献として適していると考えた。喜と右馬が対話する形式で書かれている『天草版平家物語』のうち、特に二人の掛け合いが多い p.9,21 行目から p.10,22 行目の「それならば語りまらせう.」までと、p.12,24 行目の「その内に一人は」から p.13 までを取り上げ、用言（動詞・形容詞・形容動詞)、名詞、助詞、助動詞、その他の品詞（副詞や接続詞）ごとに分類し、そのそれぞれで現代でも使われる語または現代でも伝わる古語(A とする)の割合をデータとして集計する。ただし、参考にする『天草版平家物語』は歴史物語ということもあり、当時の有名な人物の名前や地名が多く出てくるので、名詞のなかでも固有名詞は集計に含めない。

3. 結果

品詞によって A の占める割合が大きく異なることが分かる。名詞や助詞は文中に使われる頻度も多く、A の占める割合も比較的高い。一方で文中で重要な役割を果たす用言や助動詞は文中に使われる頻度は少なく、A の占める割合も高くない。

表 1 ：『天草版平家物語』の各品詞の語数と A の語数および A が占める割合

	単語数	Aの単語数	Aの占める割合(%)
用言	81	67	83
名詞	85	75	88
助詞	113	107	95
助動詞	70	51	73
その他	16	11	69

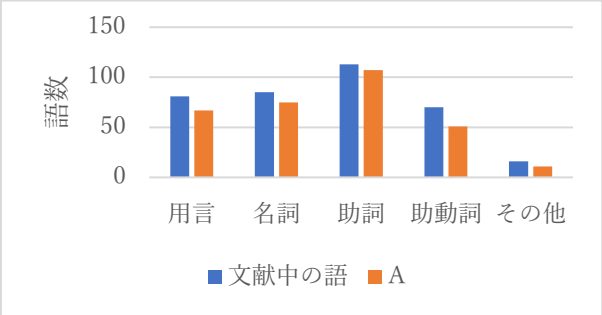

図 1 ：品詞別、文献中の語数と A の語数の比較

4. 考察

相澤(2011)は、文章の総語数のうち読み手が知っている単語の割合（語彙カバー率）が 95%というのが文章の大体の理解で一つの目安になると述べている。この観点から考えると、表 1 から見るに全体の語彙カバー率は 95%を下回っているのでこの文章を理解するのは難しいことになる。ただしここでは読解ではなく対話に焦点を当てていることに注意したい。実際に戦国時代にタイムスリップして人々と会話するとなると我々はボディーランゲージを駆使するだろう。しかし、そうしてはじめて意図が伝わったとしても「話」が通じるとは言えないだろう。さらに言えば当時の発音やイントネーションは現代とは若干の違いがあるし、時代背景、文化的基盤も異なる。実際、今回のデータの集計において固有名詞のカウントはしなかったので名詞の語彙カバー率は比較的高かったが、地名やその当時の有名な人物の名前を知らなければ文脈がうまくつかめず話が分からなくなることがあるだろうという印象を受けた。さらに文中で重要な要素となる用言や助動詞の語彙が現代とは大きく異なることも理解を大きく妨げる要因の一つである。しかし、中学・高校で順調に古文を学習し、なおかつその内容を忘れていないような現代人であれば、用言、助動詞、副詞、接続助詞などの語彙カバー力が格段に上昇するので、ある程度の意思疎通は可能かもしれない。

5. おわりに

今回は「現代人が戦国時代にタイムスリップして話は通じるか」という Research Question に当時の口語が多く記載されている『天草版平家物語』という文献を参考として現代語との共通点を探るという形でアプローチした。Research Question に対する答えは No である。ただし、現代人の多くは古文の学習内容をほとんど忘れてしまっているということ、「話が通じる」ことを主に口で話すことによって意思の疎通が上手に取れることと定義しているということを考慮しなければならない。

文献：

今野真二(2015)　日本語の歴史　河出書房新社出版.
Kazumi Aizawa.The Impact of Lexical Coverage on Reading Comprehension.教材学研究.2015,vol.22,p.23-30.